

マラウイでの活動紹介

鷹觜 紺
(探検息吹回療長がCA、理学療法士)

2023年4次隊で2024年4月からマラウイに理学療法士として派遣されています。マラウイは、アフリカ大陸の南東に位置し、モザンビーク、ザンビア、タンザニアに囲まれている内陸国です。1971年からマラウイに隊員が派遣されており、2023年の時点で総勢1,854名の隊員がマラウイで活動しています。さらにマラウイと日本は、今年外交60周年を迎えます。今回の発表では、マラウイとはどういったところかをお伝えするとともに、現時点での私の活動、今後の展望などをお話ししていきたいと考えています。

私の任地は、首都のリロングウェから北にバスで5-6時間離れた、ムジンバ県のムズズというところ
です。標高が1,200mのため、湖沿いや南部と比べ比較的涼しいのが特徴です。配属先は、ムズズセン
トラル病院で、国内にある大きい3病院のうちの1つです。大きく分けて入院病棟、外来部門(眼科、
婦人科も含む)、検査科、理学療法科があり、私は理学療法科に所属しています。主に、入院・外来患
者さんのリハビリを行なっています。

要請内容は、①成人患者・小児患者に対する理学療法の実施、②それに関する同僚への知識、技術面
での助言、③理学療法科における5Sの促進と業務改善の提案と実施、④学生の知識、技術向上のため
のワークショップや勉強会の実施となっています。6月から任地に赴任し、3ヶ月活動してきた中で見
えてきた課題が何点かあります。それは、①患者さんのリハ時間が決まっていない、②療法士自身の体
力を使うようなリハはしない、リハビリ中に患者さんをあまり観察しない、③入院患者の記録用紙・記
入場所が定まっていなく経過が追えない、前回の記録が探し出せない、④療法士の数が患者さんに対し
て圧倒的に足りないことが課題ではないかと考えています。①、③、④に対しては、業務効率の改善、
②知識の共有、技術向上が必要であると感じています。数ヶ月生活してきて、マラウイアンはあまり時
間を気にして生活していないような印象を受けます。そのため、業務の効率を上げるための活動には相
当な時間を要さなければ、定着しないのではないかと考え、まずは業務効率の改善のための活動を行う
計画を立てました。それと並行して、同僚やインターン生、学生に対する知識や技術の共有を行う勉強
会を開催できるよう準備していくつもりです。

日本と異なる文化を持つ地で、自分が活動することの大変さを痛感しています。言語の壁も大きいで
すが、マラウイアンが何を求めているのか、どんなことに手を付けていいのか、これからも話し合いを
行いながら、独りよがりの活動にならないように任期を全うしてきたいと思います。

JICA 海外協力隊における理学療法士案件の傾向と期待される活動

◎濱田光佑¹⁾、寺村晃²⁾、田中裕二³⁾、勝田茜⁴⁾

- 1) 愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 理学療法学専攻
- 2) 大阪保健医療大学保健医療学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻
- 3) D & I 株式会社 療育センターエコルド
- 4) 佛教大学 保健医療技術学部 作業療法学科

【はじめに】JICA 海外協力隊における理学療法士（以下、PT）の累計派遣者数は624名（2023年時点）に達しており、途上国における高い需要を示している。一方で、被支援国のリハビリ養成校や、PT 以外のリハビリ職種の要請案件も増加し、被支援国を取り巻く環境も急速に変化している。質の高い国際協力を継続するためには、PT ボランティアの立ち位置や被支援国の大局的なニーズを理解することが重要である。

【目的】本研究の目的は、JICA 海外協力隊の PT に対する要請概要をもとに、要請国のニーズと JICA 海外協力隊の PT に求められている活動を明らかにすることである。

【方法】2021 年から 2023 年度までの JICA 海外協力隊の PT 募集における一般案件 81 件を対象とした。データは JICA からの許諾を得て、ホームページに公開されている情報を抽出し、要請国・機関、要請概要（要請理由・背景、予定される活動内容）、資格等条件（経験年数、語学レベル、学歴等）を集計した。また、要請概要については、KH Coder による Text mining を行った。なお、大阪大学人間科学研究科・共生学系研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】地域別要請数はアジア 28 件、中南米地域 20 件、アフリカ地域 13 件、中央アジア・コーカサス地域 10 件、大洋州地域 9 件、中近東地域 1 件であった。応募条件として、語学能力は全ての案件で選定基準に英語が適応された。語学レベルは、JICA が定める 4 段階の基準（A が最も基準が高い）で、レベル D が 51 件、レベル C が 26 件、レベル B が 2 件であった。経験年数は 2 年以上が 13 件、3 年以上が 42 件、5 年・10 年以上が 26 件であった。また、大卒以上の学歴を求めるものが 28 件であった。KH Coder の結果から、媒介中心性が高い語句として「資格」、「経験」、「少ない」が抽出された。サブグラフ検出では業務の改善と提案、理学療法の提供、量的支援の必要性を中心とした 13 のグループが生成された。

【考察】 JICA 海外協力隊の要請国は主にアジア・中南米地域であり、依然として量的な支援が求められている。また、PT の要請条件として、語学能力よりも学位や経験年数が重視される傾向があり、専門職としての知識・技術に加えて、医療先進国の一員として要請国の課題を俯瞰的に洞察し改善する能力が求められる。

宮城県理学療法士会 国際交流・支援等委員会の活動と展望

◎成田徹平^{1,2)}、三田村徳^{1,3)}、古川雅一^{1,4)}、菊池真美子^{1,5)}、庄司剛仁^{1,6)}、菅原美波^{1,7)}

- 1) 宮城県理学療法士会国際交流・支援等委員会
- 2) 東北大学病院リハビリテーション部
- 3) 東北医科薬科大学病院リハビリテーション部
- 4) 仙台医健・スポーツ専門学校
- 5) JICA 東北市民参加協力課
- 6) 石巻健育会病院
- 7) 仙台市健康福祉局地域包括ケア推進課

【はじめに】一般社団法人宮城県理学療法士会(以下、MPTA)において、2021年5月に国際交流・支援等委員会が常設委員会として独立した。国際協力は、日本理学療法士協会の事業にも位置付けられている。県士会としての取り組みを報告することは、よりよい国際協力を検討する上で役に立つ。

【目的】MPTAの国際交流・支援等委員会のこれまでの活動を紹介し、これからの展望を報告することとした。

【方法】MPTAの国際交流・支援等委員会の活動について、MPTAが発行している報告書等の資料を中心に情報を収集し、整理した。

【結果】当委員会活動の対象は、MPTAや学生、各国際支援団体、在日外国人、留学生と多岐に渡る。目的は、異文化・多文化の相互理解を深め、グローバルヘルスへの貢献や国際・地域社会の安定を目指すこととしており、活動目標・方針として①海外理学療法士や外国人との国際交流②在日・在留外国人や外国人材への支援③多様化する社会へ柔軟に対応することとしている。これまでの活動として、2020年にwebアンケート調査を行い、活動の糸口を見出した後、2021年「海外活動とその後の多様なキャリア」元JICA海外協力隊を講師に迎え、講演と座談会を実施。2022年9月「国際交流のミリョクと語学のキホン」、12月「スポーツ活動と国際活動経験」各現場の実践などに至る経緯や必要なスキル、知識などをご講演いただき、若手理学療法士のキャリアや今後の活動へのきっかけづくり、挑戦し続ける大切さを学んだ。2023年「整形外科・スポーツ理学療法の実践と臨床留学までの歩み」アメリカ留学の経験から国際活動の新たな選択肢を見出した。また日本理学療法士協会国際事業として「グローバル社会における理学療法士の活躍に資する事例紹介」にて、国際的な活動や運営についても活動報告した。

【考察】グローバリゼーションが進んできているなかで、MPTAにおける海外・国際分野の活動は遅れをとっていた。しかし当委員会の活動により国際展開は確かに進んできている。今後の展望として、World Physiotherapy学会、アジアを中心とした予防・ヘルスケア事業、外国人診療や外国人材への支援など課題が残されているなかで、今後も活動を続けていく。

【倫理的配慮】本研究は文献研究のため、倫理審査の対象とはならない。

理学療法を学ぶ学生がカンボジアの医療に対して抱いた印象～カンボジアスタディーツアーに参加して

◎中村光沙¹⁾、高橋恵里¹⁾

1) 福島県立医科大学 保健科学部 理学療法学科

【はじめに】理学療法を学ぶ学生が自国と異なる環境の医療やリハビリテーションの現状を知ること、職業観の醸成、医療福祉制度の再考、人間的な成長に役立つとされている。現在、医療福祉やリハビリテーションの領域で中低所得国におけるいくつかのスタディーツアーが開催されているが、スタディーツアーへの参加者がどのような印象を持つのかについては明らかにされていない。

【目的】カンボジアスタディーツアーへの参加者がカンボジアの医療に対して抱いた印象を明らかにすることとした。

【方法】対象者は、株式会社 Kitahara Medical Strategies International によるカンボジアスタディーツアーに参加した理学療法学生 8 名とした。スタディーツアーは 2024 年 3 月に 6 日間の日程で開催された。スタディーツアーではカンボジア国内の医療機関 4 施設などで見学をした。アンケート調査は 2024 年 8 月に Google フォームを用いて行った。質問は、ツアー参加時の学年、最も印象に残った施設とその理由、日本とカンボジアの医療の違いについて印象に残った点、日本の医療の良いところ、カンボジアの医療の良いところとした。

【結果】7 名から回答が得られた（回答率 87.5%）。ツアー参加時の学年は 1 年 3 名、2 年 1 名、3 年 3 名、4 年 1 名であった。最も印象に残った施設は、National Pediatric Hospital 3 件、Sunrise Japan Hospital 2 件であった。最も印象に残った理由は、日本との衛生面や設備面の差に驚いたため、日本との差を実感したためなどが挙げられた。日本とカンボジアの医療の違いとしては、家族の関与 4 件、保険制度 2 件、国民性 2 件などが回答された。日本の良いところとしては一定の医療水準、良い衛生状態、保険制度が挙げられた。カンボジアの良いところは、家族の支援、海外から技術を取り入れる障壁の低さ、経済状況に合わせた負担額の変更などが挙げられた。

【考察】医療現場の見学においては、自国との差を強く感じる現場が印象深いことが分かった。参加者は日本とカンボジアの差を認識し、家族の関わりがカンボジアの良いところと認識していた。

【倫理的配慮】本研究にあたり、対象に目的、方法、データの扱いなどに関して十分な説明を行い、学会発表をすることについて同意を得た。

モンゴル国の都市部と地方部の地域在住高齢者における運動習慣と移動能力の比較

◎高橋恵里¹⁾、Yanjinsuren BATBAYAR²⁾、Ganbaatar NAMUUN²⁾、Dambadarjaa BATLKHAM²⁾、Khadbaatar ARIUNAA²⁾、Bayartai MUNKH-ERDENE²⁾、齋藤崇志³⁾、大森圭貢⁴⁾、小笠原牧¹⁾、河村晃依⁵⁾、曾根稔雅¹⁾、柴喜崇¹⁾、遠藤康裕¹⁾

- 1) 福島県立医科大学保健科学部理学療法学科
- 2) モンゴル国立医科大学看護学部理学療法学科
- 3) 国立障害者リハビリテーションセンター
- 4) 湘南医療大学保健医療学部リハビリテーション学科
- 5) 北里大学医療衛生学部リハビリテーション学科

【はじめに】モンゴル国における高齢化率は、今後50年間で現在の約4.5%から約20%まで増加すると予想されており、日本国同様にフレイル高齢者が急増することが想定される。都市部と地方部では生活習慣や環境が異なることから運動習慣や移動能力に違いがあることが予想されるものの、その違いは明らかにされていない。

【目的】モンゴル国における都市部と地方部の地域在住高齢者の運動習慣と移動能力の違いを明らかにすることとした。

【方法】研究デザインは横断研究とした。モンゴル国のウランバートル市（都市）とドントゴビ県マンドルゴビ市（地方）において、2024年8月の高齢者生活機能測定会に参加した地域在住高齢者72名を対象とした。データ欠損者を除外し66名（都市33名、地方33名）を分析対象とした。調査項目は運動習慣とし、質問紙により現在の運動習慣と定期的な運動の継続について5件法で調べた。測定項目は、身長、体重、5回立ち座りテスト（以下、SS-5）、10m歩行時間（快適・最大）、Timed Up and Go Test（以下、TUG）とした。都市と地方の2群に分け、群間比較には正規性の有無に応じて対応のないt検定もしくはMann-Whitney U検定、またはカイ二乗検定を用いた。統計処理にはIBM SPSS Statistics Ver. 29を使用し有意水準を5%とした。

【結果】2群間において、年齢（平均：都市72.1歳、地方72.3歳）、性別（女性：都市26名、地方26名）、身長、体重に有意差はなかった。現在運動習慣があるのは、都市28名（84%）、地方17名（51%）で分布に有意な偏りがみられた。SS-5は都市で有意に短く（中央値：都市11.0秒、地方13.0秒）、10m歩行時間は快適・最大ともに都市で有意に短かった（快適・中央値：都市7.6秒、地方9.1秒、最大・中央値：都市5.7秒、地方6.6秒）。TUGには有意差がなかった（中央値：都市6.7秒、地方6.9秒）。

【考察】モンゴル国では都市部と比較して地方部の地域在住高齢者の運動習慣が少なく、下肢筋力が低く、歩行速度が遅い可能性が示された。本研究は対象者数が少なく一地域について調査したものであるため、国全体の違いを知るためには更なる検討が必要である。

【倫理的配慮】本研究は福島県立医科大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【次年度の学術大会のお知らせ】

国際リハビリテーション研究会 第9回 学術大会

開催日：2025年12月14日（日）東京都内
大会長：石井 清志(薬ゼミ情報教育センター)



グローバルヘルスにおける
リハビリテーションの挑戦

学術大会概要

大会名 国際リハビリテーション研究会 第8回学術大会

テーマ 「国際リハビリテーションにおける地域共創

～海外と国内の経験を共有しよう～」

大会長 高橋 恵里（福島県立医科大学）

会 期 2024年11月17日（日）9:30～15:50

会 場 いろどりの丘（宮城県東松島市野蒜ヶ丘2丁目25-2）

学術大会学会運営組織

実行委員長

勝田 茜 佛教大学

実行委員

石井 清志	薬ゼミ情報教育センター
川野 晃裕	リニエ訪問看護ステーション キッズ世田谷
車井 元樹	国際医療福祉大学成田病院
河野 眞	国際医療福祉大学
齋藤 崇志	国立障害者リハビリテーションセンター研究所
庄司 剛仁	石巻健育会病院
知脇 希	帝京平成大学
津 玄德	福岡リハビリテーション専門学校
道願 正歩	慶應義塾大学
古川 雅一	仙台医健・スポーツ専門学校
三田村 徳	東北医科薬科大学病院
山口 佳小里	国立保健医療科学院

国際リハビリテーション研究会

第8回学術大会 抄録集

発 行 者 : 国際リハビリテーション研究会
Home Page : https://int-rehabil.jp
E - m a i l : jsir.office@int-rehabil.jp